

源氏物語のよみ方 I (98・11・18)

秋山 虔(昭18・文丙)

限られた一時間位で今日は序章ということでお話ししたいと思います。私はよく講演などで引用するのですが、源氏物語研究の泰斗であられた池田亀鑑先生、このお方は私が東京帝大の国文学科の学生であった頃、教授でしたが、「源氏物語の構成と技法」という長大な論文をある雑誌に書かれました。源氏物語のいろいろな登場人物の物語世界のなかでの行跡について、その話の型やモデルなどを一々調査した論文です。その論文の終りの方で、こういうことを述べておられます。

「源氏物語はあまりのも神秘にして幽邃な森である。この森はどのような声にも反響する。どのような解釈も、どのような批評も黙々として受けるであろうが、しかしそれらは必ずしも森の真意とはいえない。それらの多くは解釈者みずからの解釈であり、評者みずからの批評に過ぎぬ。人々はこの森においてみずからの心のエコーを耳にしているに過ぎ

ない。それだけにこの森にたち向かうわれわれの心は、謙虚でそして真剣でなければならぬ。」

以下は省略しますが、この池田先生の言葉が忘れられないのです。つまり源氏物語は、どのような姿勢で、どのような問いかけにも応じてくれる。どんな風にでも読めるわけです。『国文学年鑑』を調べますと、源氏物語の論文、著書は年間二五〇から三〇〇あります。一年間にそれほど多くの人が源氏について発言しておられるのです。大型書店に行きますと源氏コーナーが設けられています。これは古典といわれる作品の特性なのだろうと思ふのですけれど、源氏と出会う人々のありようによって、源氏は様々な姿を呈しているといえましょう。私の経験でもいえるのですけれど、一人の人間にとっても若い時から、また歳をとってから、また気分が高揚している時とか、悲しいことがあった時とか、そういうこちらの心のありように応じて、源氏はとりどり様々な姿を提示しているといえます。

私は長い間教員生活をしておりまして、学生の要望に応じて源氏を解読する演習を担当したのですけれど、そこで私の読みを学生に伝授することより、むしろ、学生によっていろいろな源氏の読み方を教えられたといってもいいと思います。ことに、女子学生の源氏の読み方には、ハツとするような、やっぱり女の立場にとつて源氏を読むと、男ではわからないようなことを教えられました。もっともそのことによつて、私の源氏物語観が一変

するということはないのですが、今まで見えていなかったものが、はっきりと見えてきたりすることがあります。生きている限り、こういう源氏とのつきあいは続いていくのではないのでしょうか。

これはご存じでしょうが、源氏物語の本質は「もののあわれ」を知らしめることにあるということ宣言した江戸時代の本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』という、源氏研究史上のモニュメンタルな名著の総説に、

「自分は、これまで長い間何度も弟子たちに源氏の購読をしてきたけれども、その度ごとに、いつも初めて読むような感動を味わっている。普通、源氏のような長いものでなくとも、何度も読んだら飽きてしまうだろうけれど、源氏はそうではない。実に新鮮な感動を喚起させられるにつけても、これは素晴らしい作品であることが実感される」と述べています。この宣長の言葉に私はたいへん共感しております。

私は学生時代からですから、源氏物語と半世紀もつきあっているのです、何の巻に何が書かれているか、どのページをめくればどうということが書かれているかということとは、大体わかっているのですが、それなら読まないでいいのかということそうではない。読めば、宣長と同様に初めて読むような実感を懐くわけです。

その源氏物語は、現在いわば大衆化とでもいいでしょうか、大変なじみやすい現代語訳

が出ております。与謝野晶子訳、谷崎潤一郎訳、なお、この谷崎訳は戦前の訳と戦後の二種類、それから円地文子訳、そして最近は瀬戸内寂聴訳がベストセラーになりました。それからいろいろな梗概本、縮約本も出ています。田辺聖子さんや橋本治さんの体内を通した源氏小説とでもいうものも出ておりますし、中村真一郎氏、竹西寛子氏、丸谷才一氏などのすぐれた評論も忘れられません。紫式部殺人事件などという推理小説もあり、マンガの源氏物語も五・六種類あります。大和和紀さんの『あさきゆめみし』は大変な名作だと思います。ある女子高生から手紙が来て、源氏物語は素晴らしいということを盛んに述べているのですが、その手紙をよく読んでみますと、『あさきゆめみし』なのです。とにかくいろいろな形で源氏は大変流布していると申せましょう。テレビで高等学校の教室風景を見たことがあるのですが、生徒が『あさきゆめみし』をひろげて先生の話聞いていて、先生もそれを奨励しているようなのです。

考えてみますと、源氏物語が成立した時代に、どういう享受のされかたをしたかといえますと、十二世紀の初めに現在国宝になっている源氏物語絵巻が作られて、その一部分が五島美術館と徳川美術館に分蔵されていますが、絵と物語が一緒になっていて、絵を見ながら物語本文が享受される仕組になっています。その源氏絵のなかに浮舟という女性が絵を見ていて、その横で女房が草子本を読んでいる場面が描かれています。姫君が絵を見な

から女房が詞を読んで聞かせる、そういう享受の仕方がありました。ですから現在のマンガによる源氏の享受の仕方、まんざらおかしくはないわけです。現在高校生の進学率は九五パーセントぐらいといわれていますから、ほとんど義務教育化していると言えます。その教室に必ず源氏の本文は持込まれているのですから、現代人にとって源氏はたいへん身近な存在になってきてきているといってもいい、親しみにくい難解な現代の小説よりはるかに身近になっていると言ってもいいわけです。これは結構なことだとは思いますが、こういう大衆化と差し違いに、源氏の源氏たるところが、どこかに隠されてしまう恐れがないだろうか。つまり、源氏が現代人の関心の座標の上にひきすえられた時に、どうしてもひきすえることのできない何か、どこかに置去りにされてしまっていることがないかと懸念されます。ですからこの源氏ブームに諸手をあげて賛成しかねるところがあるのです。いったい源氏が作られた平安時代、一条天皇の時代なのですが、この十一世紀の初めから現在まで一千年という時間が経過しております。かつて有名な東洋史学者内藤湖南先生が、京都を舞台にした長期わたる応仁の大乱を境にして日本の歴史は二分されると考え、この戦乱以前は外国の歴史と同じとさえ考えられるから、日本を知るためには知る必要がないと言われました。それ以後に作られたさまざまな文化現象こそが我々の生活に直結しているということです。一面適切な指摘であったと言えましょう。

王朝文化の伝統を育んできた京洛の地はその大半が焦土と化しました。この間も私はあの西山のいろいろのお寺を廻ったのですが、どのお寺のお坊さんも、もとの建物は応仁の大乱で焼亡して、それ以後の建立だと説明されるのです。ですから、とにかく王朝文化の伝統はそこで切れてしまつて、やがてその中から現代に通ずるさまざまな文化が生み出された。それが内藤さんのご意見でして、それを敷衍するような形で劇作家で評論家の山崎正和氏が『室町記』という名著を出しておられます。いかにもそれ以前は異文化の時代であるといえるかも知れません。そのことは加藤周一氏が朝日新聞に連載中の「夕陽妄語」にも書いておられました。いかにも住居、調度、乗物、衣服といった生活様式、いろいろな年中行事や儀礼や公式の行事など、それから信仰、俗信、迷信、遊芸、娯楽など、私達にとってほとんど追体験は不可能というほかないので、そういう時代、社会の言語によつて書かれている源氏物語の世界に、私達が簡単に入つていくことはできないのです。そこで、どうしても注釈書が必要になります。私も出版社からせつつかれて作りました。それから、実質的には古典百科事典といつていいような、たくさん図版の入つた古語辞典が出ておりますので、そういうものの導きによって、源氏の世界に分け入ることは困難ではないかもしれません。しかし、それらの資料の説明が懇切であり、精彩であればあるほど、物語のなかの人々が生きる現実の生活と、現在の私達の日常生活との懸隔を実感せず

にはいられないのです。生活万般のきまりもさりながら、その時代の人々の気持を表す古語と現代語との意味のうえでの断絶も否定しがたいと思います。例えば、源氏のなかに「いとほし」、「らうたし」、「心苦し」などという語が数百回使われております。こういう語を現代語にどう訳すか、非常に難しい。現代語では気の毒とか、かわいそうとか不憫だとかそういう言葉しか考えられませんが、実は「いとほし」という語は、弱い者劣った者を見て、目をそむけたくなるような、自分でもどうしていいか困ってしまうという気持なのです。「心苦し」というのは、弱い者劣った者を見て自分でもどうにかなりそうだと一緒にあって心が痛む気持。「らうたし」というのは、弱い者劣った者に対して手を差し伸べてやらなかったらどうにかなってしまいそう、という気持。共通しているのですけれど、微妙に意味が違ふのです。こういうそれぞれ語感をちゃんと味わい分けて読んでいくのでなければ、源氏を読んだことにはならないのです。主観的なものと客観的なものと総合的な表現なのです。例えば「恥ずかし」という語にしても、現代語だったらこっちが恥ずかしいのですけれど、こちらが恥ずかしく思わずにはいられないくらい相手が立派であることも表現しているのです。要するに、客観的なものによって主観的なものが触発される。その触発されたものに対応する客観的なものの有様を表すのです。

皆さんは国文法の教科書で、「つ」「ぬ」「たり」「り」、「き」「けり」など、用言の活用

を覚えさせられたことを思い出されるでしょうけれど、そういう助動詞に対応するような現代語があるかという点、「たり」という語から変化した「た」ぐらいです。源氏の時代の人々はそういう語をちゃんと使い分けていたのに、今日ではもう失われてしまっています。ですから、源氏の時代の人々の心と現代人である私達は、そう簡単に心と心を合わせることができないだろうと思います。そういう言葉の問題ばかりではなくて、文章法、これも現在の文章法には馴染まない場合が非常に多いのです。例えば、これは国語・国文学の専門用語かもしれませんが、心内語、心中思惟あるいは内話というタームがあります。つまり心で思った言葉で、誰それがこうこう思ったというその内容です。ところが源氏の文章は、この心内語と地（じ）の文、つまり語り手、作者の言葉との区別がない場合が多い。つまり、何々と思ったというときの「と」が無いのです。何々というのは作中人物の心内かと思つて読んでいくと、そうではなくて語り手の言葉になってしまっている、そういう場合が多いのです。語り手の言葉と作中人物の言葉との区別が付かないような形で書かれている文章なので、正確には「」の符号を付けられないのです。ですから、大変論理的な思考の持主であった直長はどうしてもこれはおかしい、何か言葉が足りない心地がする、「と」の文字が落ちてきているのだろう、などという批評を先に申した『玉の小櫛』のなかで随所にやっています。接続詞の「と」をいれなければ、こういう文章はどうしても

現代語になりません。ですから私は、登場人物の心の世界と、心の世界を語る作者の言葉が区別されないようなそういう表現法に、そのまま自分の心を委ねたいと思います。人間の心の世界とそういう世界を抱く人間とが、どういう状況にいるのかということ全体的に表現するユニークな文章として、そのまま受入れべきだろうと思います。

現代の国語教育では、論理的に正確に物事を表現することを教えていますが、しかし、人間を全体的に捉える、その捉え方はむしろ現代語では衰弱してしまっているのではないのでしょうか。先程申しましたが、「恥ずかし」とか「心苦し」などという語を学生はよく間違つて解釈します。「心苦しき有様」といふ言い方がありますが、こちらが心苦しうような相手の有様という意味なので、相手の有様とこちらの気持を全体的に表現するのが、この「心苦し」なのです。そういう全体性を捉える視点の語は現在にはないでしょう。古典語を曖昧だと考えるのではなくて、むしろ非常に多義的な包容性を持っている、そういう言葉が現在では失せていると考えるべきだと思います。

そういう源氏の文章を素晴らしいと言っている人がいます。先程ちよつと名前をあげた竹西寛子さんですが、次のように言っておられます。

「一見曖昧で不明瞭な源氏物語の文体だが、ゆるやかなリズムで築き上げられた言葉の宇宙に一度閉じ込められてしまうと、一つ一つの言葉が、いかにも確かな揺るぎないもの

として、場を占め、意味を持って息づいて来ることに気付かせられる。細部に表情がたたえられるのもこうした文体よつてのことなのである。急いで結論を出す必要のある文章、読者の感受性ではなく観念に直接訴えなければならぬ文章、論理の組立ての厳正さやかけがえないものとする文章、推定せず断定し続けなければならぬ文章の場合、こういう源氏の文体は、まず不向きだといえよう。しかし、読者の観念に直接訴えるよりも、感受性に訴えることが先決であり、作者の感受性を十分表現するために夥しい数の生と死の交錯を必要とする長編、膨大な空間と時間を必要とするこの源氏物語には、まことにふさわしい文体だったといふことができる」

これは抽象的な説明ですけれど、竹西さんは具体的に文章を引いてこういう批評をされているのです。源氏の文章については、まだまだ俎上に上せて然るべき特徴があるのですが、時間の制約もありますし、この位で止めておきますけれど、なお、もう一つ申しますと一つの文のなかで主語があちこちに変る、しかも、その主語が示されていないのですから、我々読む方でコンテキストのなかから、これは誰が言っているのか、誰が何をしているのかを判定しなくてはならない。それから、敬語の使われ方から誰の行為であるか判定しなくてはならない、そういう表現があります。だいたい日本語の生きた言葉には主語は無いのではないのでしょうか。私どもの日常の会話でも「あなたは」「私は」といちいち言わな

いし、言わなくても通じます。源氏の文章は、そういう生きた言語だと思つてのですが、先程申しましたように、この作中人物の心の表現かと思つておりますと、語り手の感想のよう、いや、作中人物と作者が一体であるから、どちらとも決めがたいといったぐあいなのです。

けれども、これは正確な論理性の要求される言語表現の座標からすれば、どうにもならない文章だと言えるかもしれません。和辻哲郎氏がそういう文章に対して、厳しく批判的な文章を書いています。例えば、「橋姫」の巻に主人公の薫大將が、宇治の姫君達が箏の琴や琵琶を演奏しているところを覗き見る場面があるのですが、薫大將の目と心にそつた文章が一転して、薫に見られている姫君の心の表現の方に移り、すぐさま今度は作者の言葉が変わってしまう。この小刻みな視点の変転は不愉快だと言つてゐるのです。源氏の一番悪い点だと言つてゐるのです。これに対して枕草子の方は明快な視点が一定してゐるので素晴らしいといふのです。或る一定の視点を設定して描写と説明に一貫性を持たせてこそ、すぐれた表現でありうるのに、源氏物語はそうではない。こういう源氏の文章の分りにくさは、こちらの語学力の乏しさのせいではなくて、源氏の文章の欠陥だと断定してゐるのです。こうした見解は和辻氏に限るのではないので、内村鑑三の『後世への最大遺物』、これは明治二七年の講演で岩波文庫に入つていますが、そこでも徹底的に源氏が批判されてお

ります。こういうものは国民の士気をなんら鼓吹しない、だから根絶やしにしないでほらない、とまで言うのです。では何がいかというと『日本外史』だと言うのです。この内村の意見は必ずしも独特のではなく、そういうふうな通念があつて、それをふまえたものの言い方だったろうと思ひます。日清戦争直前ですし、この時期に内村は戦争に賛成の立場にありました。日本のナショナルリズムというのでしょうか、こうした時期に源氏のような懦弱なものは葬らなくてはならないという機運があつたのだらうと思ひます。

それから、日露戦争直前でしたが、高山樗牛の「吾が好む文章」でも源氏が徹底的におとしめられています。樗牛は御承知のように平家物語に取材した『滝口入道』という小説を書いていきます。平家物語が好きで源氏は大嫌いなのです。それから斎藤緑雨の全集が筑摩書房から最近出ましたが、その随筆のなかで、源氏物語が読むに堪えざることは、一読せずとも明らかかなりと言っています。

このような明治時代以来の批判を総集したのが正宗白鳥の源氏悪文説で、それを紹介します。「中央公論」の大正二五年八月号で、我々が生まれた頃です。文芸時評に「古典を讀んで」という文章を書いてこう述べています。

「源氏物語を讀んでグラグラしたしまりのない文章にうんざりした。いくら千年前に世に現れた古典であるにしても、同じ国に生まれて少年時代から多少は古文を學んできた私

が、日本最大の傑作と折紙の付いたこの物語に嫌悪を感じるのは不思議である。しかし、事実において、こんなに読みづらいものに接したことはなかった。自国の文学では国宝視されている源氏を読みながら、幾たび叩き付けたい思いを続けたか知らなかった。内容はとにかく無類の悪文である。今時こんなものを学校の教科書にする法はないと思う」。これは大正一五年ですが、さらに「改造」の昭和八年九月号にも、文芸時評で次のように述べています。

「我ながら不思議に堪えないのはウエレー氏の *The Tale of Genji* が面白くて、紫式部の源氏物語が相変わらず左程面白く思われないことである。(中略) 源氏の訳も、強いて原文通りにしたら、何のことやら分らないものになるに決っている。ウエレー氏は、しかし、決して原文の一語々々を無視しないと、それを説明化してはいない。原文は簡潔とはいえ、頭をチョン斬って胴体ばかりがふらふらしているような文章で、読むに歯痒いのであるが、訳文はサクリサクリと歯切れがいい。糸のもつれのほぐされる快さがある。(中略) 伝統は重んじなければならぬというような理論は理論として、大抵の文学愛好者が源氏にはうんざりするに違いない。昔から言われているように、「須磨」「明石」まで辿り着いたら、読書の旅も打留めたくなるのである。しかし、ウエレー氏の訳本を手にした文学愛好者なら、次から次へと読みたくなるほどの興味をさそわれるに決っている。翻訳

もあなどりがたいもので、死せるがごとき原作を活返らせることもあるものだ、と私は感じた」。

この文章を引用した高杉一郎氏は

「私などとてもこんな大胆なことは言えないが、しかし、正直言つて白鳥の放言は原文を異邦人のように四苦八苦しながら読んでいる私などの胸には強く訴えて来る。第一、原文にある複雑きわまる敬語の用法や、曖昧に隠されていて同一の文章のなかでさえ変るこ

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて書どもなど見たまふ。近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、「さりぬべきすこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」とゆるしたまはねば、「そのうちとけてかたはらいたしと思されむこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、数ならねど、ほどほどにつけて書きかはしつとも見はべりなむ。おのかじし恨めしき折々、待ち顔ならむ夕暮などのこそ、見どころはあらめ」と怨ずれば、やむことなく切に隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などに、うち置き散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、これは二の町の心やすきなるべし。

It was on a night when the rain never ceased its dismal downpour. There were not many people about in the palace and Genji's rooms seemed even quieter than usual. He was sitting by the lamp, looking at various books and papers. Suddenly he began pulling some letters out of the drawers of a desk which stood near by. This aroused To no Chujo's curiosity. 'Some of them I can show to you' said Genji 'but there are others which I had rather...' 'It is just those which I want to see. Ordinary, commonplace letters are very much alike and I do not suppose that yours differ much from mine. What I want to see are passionate letters written in moments of resentment, letters hinting consent, letters written at dusk...'

He begged so eagerly that Genji let him examine the drawers. It was not indeed likely that he had put any very important or secret documents in the ordinary desk; he would have hidden them away much further from sight. So he felt sure that the letters in these drawers would be *nothing to worry about.*

とがある主語が、英訳では首尾一貫して明確な文章に改められているのが有難いし、さらに場景をくつきりと視覚化させる力を英文の方に感じる。

と述べています。この白鳥や高杉一郎氏の言っていることを実感して頂きたいと思いまし

て、「帚木」の巻の初めのところの原文とその英訳を一七一・一七二ページに掲げました。ご覧になりますと、「つれづれと降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上（てんじょう）にもをさをさ人少なに……」以下を読んでいきますと、二行目「見たまふ」で文が切れています。次の「近き御厨子……」以下最後まで切れ目がなく、「て」「ば」「に」などの接続詞で文節をつないでいる。これに対してウエレー氏訳をご覧になりますと、簡潔な短文が前進的に畳みかけられていく。実に明快に読めるのです。私のように英語力のない人間でも、とにかくよく分る。これに対して原文の方はどうなのか。間断なく降続く五月雨（さみだれ）の一日が暮れてきて、宮中の人影もない殿上の間のさびしさから、視線がごく自然に移動して、光源氏の宿直所（とのいどころ）つまり私室となり、燭台の光の行き渡る範囲の中に源氏と頭中将とが親しく語り合う姿に焦点がしぼられてくる、いわばズームレンズの作動を思わせるような文章の運びです。私はこれを悪文というふうにはとても言えないのです。この途切れることなく紡がれていくセンチメンスのうねりによって、時間的、空間的に措定された場面と、その場面の中におかれる人間とが一体に溶けあっている。そういう實在感がたえられています。源氏の文章をその英訳文と比較してみるの、英語文を基準にして、源氏の文章が曖昧だということをおうとするのではなくて、むしろその固有な特色を認知するための作業にしたいと思うのです。

そういうことで源氏の文章は、大変馴染みにくいと言われるのですが、それをおとしめることに私は賛成できないのです。要するに、先刻も申しましたように、注釈書や古語辞典に助けを借りて、源氏の文章に抱取られること、そして源氏の文章の進行に身を委ねて、作中人物と悲喜哀歓を共有しながら歩んでみる、そうすると我々の実人生とは別に、もう一つの別世界の人生を経験することができる。そのことによって、そちら側から現実を見る目を培う。それが現実から未来に向ってどう生きていくかという、知恵の一つの源泉になるのではないか。そういう教訓的なことを申すのは短絡的ですけど、とにかく物語の世界と現実の世界の両者を往反する、そういう経験が大事ではないかと思えます。

最初に瀬戸内寂聴さんの現代語訳のことを申しましたけれども、大変評判が良くて、多くの評論家や作家が賞賛していますが、それは瀬戸内さんの文学です。円地文子さんの源氏は円地さんの文学、与謝野晶子さんの源氏は与謝野晶子の文学だというふうに考えます。現代語訳はやはり原文とは別個のテキストだと考えたいのです。如何に原文に忠実な現代語訳であろうとも、また原文の風趣を活かすべく如何に努力を払われたとしても、やはり現代語訳は原文とは別個に自立した作品だと考えたほうがいいわけです。どこまでも原文に立ち向い、原文によって抱取られることが必要でしょう。いったい古典というものが、そう容易に現代の文学と同じように理解できるはずのものではないのです。さきほど申し

ましたように、いろいろの面で断絶があるわけですから、それを越えるべく努力することによってもう一つの世界を経験することができると言える。現代語訳では、もう一つの世界を経験するというより、やはり現代の源氏になってしまふのです。源氏物語の時代の源氏に、こちらから己れを転位していく必要があるのではないでしょうか。その源氏物語をどのように見ていったらいいのかということですが、これは次の機会にもう一回、時間を頂いて申上げたいと思います。それもやはり私の源氏になってしまふのでしようけれども、なるべく現代を離れて、源氏の世界に抱取られるという姿勢を大事にしたいのです。そのことによって、もう一つの人生を生きたことの喜びを経験することになります。以上のような序説だけで、本日は終らせて頂きます。

(東京大学名誉教授)